

キング牧師の「私には夢がある」再考：
ブラック・フェミニストは
キングの夢を共有できたのか？

大橋 稔*

Rethinking of Martin Luther King, Jr.'s "I Have a Dream": Do Black Feminists Share the Dream of King, Jr.?

OHASHI, Minoru*

Abstract

The purpose of this paper is to describe whether African American feminists can share the dream of Martin Luther King, Jr., which can be considered to be the goal of the Civil Rights Movement in and after the 1960s. Through textual analyses of the text of King's "I Have a Dream" and the writings of Black feminists, I describe that they have some similar perspectives. Because of these similarities, I conclude that most Black feminists share King's dream as their dream and goal of their movement.

* 城西大学語学教育センター准教授

はじめに

1963年8月28日にワシントンD.C.で行われたワシントン大行進のクライマックスを飾ったのは、マーチン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luther King, Jr., 1929-1968）による「私には夢がある」（“I have a Dream”）スピーチだった。このスピーチでキングが語ったのは、黒人に対する差別が横行するアメリカ社会や、有効な政策を打ち出すことの出来ない政府に対する不平不満や恨みではなく、合衆国社会において差異を越えて共に生きようとするキングの信念であり、希望であり、夢だった。

20万人を超える人々が集結したワシントン大行進は、1950年代に始まったアメリカ黒人¹による公民権運動の象徴的な出来事だったと言える。そこには黒人だけではなく白人や、他のマイノリティも多く集まっていた。また運動家だけではなく、多くのマスメディアも集まり、その様子は全米の茶の間にも届けられた。この意味において、ワシントン大行進の最後を飾ったキングのスピーチ「私には夢がある」は、ワシントン大行進の象徴であると同時に、公民権運動の象徴であり、公民権運動家が目指していた夢であったと言うことも可能である。そして今日、キングの「私には夢がある」スピーチは、合衆国史上最も優れたスピーチの一つと位置づけられている。

しかしここで一つの疑問が生じる。後の証言や研究が明らかにしたように、公民権運動はアメリカ黒人の差別からの解放、自由、公民権を求めた運動であったにも関わらず、その運動の内部では性差別が横行しており、性差別体制によって支えられた運動だった。そのため黒人女性たちは、公民権運動以後も女性解放運動などを闘わなければならなかった。このような性差別体制を温存した公民権運動の象徴として示されたキングの夢は、黒人女性にとっても共有することが可能な夢だったのだろうか。

キングが示した夢が、アメリカ黒人女性にとって、特にブラック・フェミニズムの文脈において共有可能なものであったのか否かを検証することが本稿の目的である。この検証に先立ち、ブラック・フェミニズム研究、特にアメリカ黒人女性史研究において、キング

1 アフリカから連行され奴隷とされた人々と、その子孫を示す呼称は時代に応じて変わっている。現在は英語では“African American”が定着し、日本語では「アフリカ系アメリカ人」や「アフリカン・アメリカン」が学術研究において主に使用されている。このことを確認したうえで、本研究では「黒人」を用いている。その理由は、彼／女たちが人種差別の標的とされ、それゆえに人種差別と闘わなければならなかった／ならないのは、アフリカ出身者（の子孫）だからではなく、社会的構築物としての「人種」が黒人であると看做されるためだからだ。

が語った夢がどのように位置づけられているかを確認しておきたい。アメリカ黒人女性史の主要な先行研究としては、ポーラ・ギディングズの『アメリカ黒人女性解放史』(Paula Giddings, *When and Where I Enter*, 1984)、ジャクリン・ジョーンズの『愛と哀：アメリカ黒人女性労働史』(Jacqueline Jones, *Labor of Love, Labor of Sorrow*, 1984)、岩本裕子の『物語アメリカ黒人女性史』(2013)があるが、これらのいずれにおいても、ワシントン大行進における女性排除の問題が指摘されているだけで、キングのスピーチに対する評価は示されていない。またヴィッキ・クラウフォードによって編集された『公民権運動の女たち』(Vicki L. Crawford, ed, *Women in the Civil Rights Movement*, 1993)でもスピーチに関する評価についての言及はない。このような状況を考慮するならば、ワシントン大行進から半世紀を経た今日、改めてキングが示した夢がブラック・フェミニズムの文脈においてどのように位置づけることが出来るのかを考察することは、意義あることだと言える。

本稿では初めに、キングがスピーチにおいて描き出した夢の内容を整理する。その後ブラック・フェミニスト、特に黒人女性作家がエッセイや作品において示した夢や理想を概観する。そして最後に、両者を比較することで、ブラック・フェミニズムにおけるキングが描いた夢の意義を考察することにした。

I. キング牧師が描いた夢

キングはワシントン大行進の前夜、一晩かけてスピーチ原稿を練っていたが、スピーチの最中、壇上にいたマヘリア・ジャクソン (Mahalia Jackson, 1911-1972) の「あなたの夢を聞かせて」との呼び掛けに応じるかのように、原稿を離れ、自らの夢を語り出した。キング自身が忘れてしまったと語っていることから、マヘリアの呼び掛けが彼の耳に届いていたのか否かは明らかではないが (Branch, 882)、原稿を離れ即興で語り始めた彼の夢は、彼の飾らない本心に近い夢であったと考えられる。

キングは「アメリカの夢」(American dream) に深く根差した夢であるとして、彼の夢を語り始めた。若干長くなるが、この考察においては非常に重要な個所となるので、そのすべてを引用しておきたい。

I say to you today, my friends – so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

dream.

I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: “We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal.”

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

I have a dream that one day even the state of Mississippi, a state sweltering with the heat of injustice, sweltering with the heat of oppression, will be transformed into an oasis of freedom and justice.

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character. I have a dream today!

I have a dream that one day, down in Alabama, with its vicious racists, with its governor having his lips dripping with the words of “interposition” and “nullification” – one day right there in Alabama little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls as sisters and brothers. I have a dream today !

I have a dream that one day every valley shall be exalted, and every hill and mountain shall be made low, the rough places will be made plain, and the crooked places will be made straight, and the glory of the Lord shall be revealed and all flesh shall see it together. (104-105、下線引用者)

ここでキングが語った夢は、六つである。一つ目の夢は、アメリカの独立宣言で示された「すべての人は生まれながらにして平等である」が真実であることが証明されることだとしている。二つ目の夢は、元奴隷の息子たちと元奴隷主の息子たちが兄弟愛を持つこと、三つ目の夢は、人種差別と黒人に対する暴力が横行するミシシピ州でさえも「自由と正義のオアシスに変貌する」という夢だとしている。四つ目の夢は、彼の四人の子どもたちが「肌の色ではなく、人格によって評価される」国に住むことであり、五つ目の夢は、黒人の少年少女と白人の少年少女が兄弟姉妹のように手を取り合うことだと言う。そして最後に六つ目の夢として語られたのは、旧約聖書『イザヤ書』からの引用で、谷や

山、険しく曲がりくねった道（つまり黒人を差別する社会体制）が平らになること（つまりなくなること）を見ることだった。

これらのキングの夢を概観したとき、初めに着目したいのは、あくまで彼はアメリカ黒人として享受するための夢を描いていたと言うことである。白人社会に仲間入りすることを目指すのではなく、既に白人が享受している成功を追い求めるのではなく、黒人が白人化することを夢として語っているのではない。黒人であることが否定されるのではなく、黒人であることを棄却しなければならないのではなく、平等な権利を有する一人の独立した合衆国市民として黒人であり続けながら、個人の内面が尊重される社会を夢見ているのだ。

奴隷解放がリンカン大統領によって宣言されたのは、キングが夢を語った 100 年前のことだった。この時、解放された奴隷たちは、白人と同じ市民として努力さえすれば白人のように成功できると信じていた。この時の彼／女らが描いた夢は、白人化することで政治的、経済的な成功を手にする事だったと言える。しかしこの彼らの夢は決して叶うことはなく、むしろ社会は彼／女らが黒人であり「二級市民」でしかないことを痛感させる方向へ進んでいった。それから 100 年の歳月を経てキングが語った夢は、黒人であることを受け入れながら平等の権利を得ることに主眼が置かれ、白人化された成功を求めるものではなかったのだ。

次に着目したいのは、キングがどこで夢を叶えようと主張していたかである。彼は、ジョージア州、ミシシッピ州、アラバマ州で夢を実現させようと訴えている。これらの州は、深南部（Deep South）と呼ばれる地域で、人種差別、黒人に対する暴力が最も激しく、根強い地域であった。そのような地域ですら「自由と正義のオアシス」に変えることが出来、そして黒人が白人と共に手を取り合いながら生きることが出来ること、それをキングは夢として語ったのだ。

奴隷制時代、過酷な奴隷労働から抜け出すため、多くの奴隷が北部を目指して命がけで逃亡した。また 20 世紀転換期には、南部の人差別や人種隔離、そして経済的な困窮から逃れるために多くの黒人が北部へ移住した。奴隷制時代より合衆国南部は常に、アメリカ黒人にとって耐えがたい暴力が横行する場であり、それらから逃れるためには捨て去らなければならない地であった。事実多くの黒人指導者や活動家たちが、南部を捨て北部へ移動しようと呼び掛けたりもした。

しかしキングは、南部を捨てようとは呼びかけなかった。次の引用は、彼が夢を語った箇所続くスピーチの引用である。

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

This is our hope, and this is the faith that I go back to the South with.

With this faith, we will be able to hew out of the mountain of despair a stone of hope. With this faith, we will be able to transform the jangling discords of our nation into a beautiful symphony of brotherhood. With this faith, we will be able to work together, to pray together, to struggle together, to go to jail together, to stand up for freedom together, knowing that we will be free one day. And this will be the day – this will be the day when all of God’s children will be able to sing with new meaning: “My country ‘tis of thee, sweet land of liberty, of thee I sing. From every mountainside, let freedom ring!” And if America is to be a great nation, this must become true. (105, 下線引用者)

ここでキングは、これらの夢が希望であり、「南部へ持ち帰る信念だ」としている。そしてこの信念があれば、「共に働き、共に祈り、共に闘い、共に獄に入り、共に自由のために立ち上がることができる」とも語っている。さらに他の箇所では、この後サウスカロライナ州やルイジアナ州に帰る人も居るでしょうと語り、また別の箇所では、ニューハンプシャー州、ニューヨーク州、ペンシルバニア州、コロラド州、カリフォルニア州の山々から「自由の鐘を鳴り響かせよ」とも語っている。つまりキングは、人種差別から逃げ出すのではなく、今住んでいる場所で自由を求めて活動し、そしてその場を「自由と正義のオアシス」に変えようと呼び掛けているのだ。

そして最後に着目するのは、実現されたキングの夢の恩恵を享受するのは誰かという点である。当然、彼は「夢見ている」のだから今ではなく将来の「いつの日か」の出来事として語られている。そしてその「いつの日か」白人と兄弟愛を共有し、兄弟姉妹のように手を取り合い、人格で判断されているのは、元奴隷の息子たちであり、キングの子どもたちであり、黒人の少年少女である。つまり彼の夢が実現された恩恵を主に享受する存在として想定されているのは、キング自身ではなく未来に属する子どもたちだと言うことが出来る。そしてキングは、未来の子どもたちのために、共に立ち上がり、共に働き、共に闘い、夢を実現させようと、今を生きる世代の者たちに呼び掛けているのだ。

このようにキングの語った夢を整理するならば、今いる場所で黒人としての誇りを保ちながら、未来の子どもたちがより良く生きることが出来る社会に合衆国を変えることだ、とまとめることが出来る。そしてその実現のために、今を生きているキングたちが、黒人であることに誇りを持ちながら黒人として、今いる場所でそれぞれが立ち上がることが彼

の夢であったと解釈することも可能だ。

Ⅱ. アメリカ黒人女性作家が描いた夢と理想

ここまでキングが語った夢について概観してきた。次にアメリカ黒人女性作家が描いた夢や理想について分析したい。黒人女性作家の作品では、伝統的に黒人女性として生きることの大切さが描かれてきた。1920年代はハーレム・ルネッサンス期と呼ばれ、多くの黒人女性作家も活躍した。この時期、肌の白い黒人が白人になりすますパッシング (Passing) を題材にした作品が多数残されている。例えば、ネラ・ラーセン (Nella Larsen, 1891-1964) の『クイックサンド』 (*Quicksand*, 1928) や『パッシング』 (*Passing*, 1929)、ジェシー・フォーセット (Jessie Redmond Fauset, 1884-1961) の『プラムバン』 (*Plum Bun: A Novel Without a Moral*, 1928) や『コメディ』 (*Comedy, American Style*, 1933) などがある。これらの作品から共通して読み取れるのは、黒人であることを隠べいし白人として生きようとした黒人 (女性) たちの挑戦、努力は報われることはないということである。これらの教訓を通じてラーセンやフォーセットは、自らが黒人であることに意識的に生きることの大切さを描いていたと言える。

このような黒人女性作家の作品の特徴は、現代の黒人女性作家にも引き継がれている。白人化することを求めて身を滅ぼした黒人少女の悲劇を描いたのは、トニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-) の『青い眼がほしい』 (*The Bluest Eye*, 1970) である。自分を醜いと思い込んでいる黒人少女ピコーラ (Pecola) は、自分が不幸なのは醜い外見のためだと考えるようになる。そしてこの不幸な境遇から抜け出すためには、白人のように美しい外観が必要だと考え、その手始めとして青い眼を手に入れることを欲する。そして呪術によって青い眼を手に入れたと信じたピコーラは、次第に精神を崩壊させ、結局死んでしまう。この作品を通じてモリスンは、黒人が白人化することによって成功を手に入れようとすることの危険性を指摘しているのだ。

またモリスンは、なぜ白人化することで成功を求めることが危険な行為であるかについての理由を明確に示している。

I (=Claudia) had only one desire: to dismember it. To see of what it was made, to discover the dearness, to find the beauty, the desirability that had escaped me, but apparently only me. Adults, older girls, shops, magazines, newspapers,

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

window signs—all the world had agreed that a blue-eyed, yellow-haired, pink-skinned doll was what every girl child treasured.... I could not love it. But I could examine it to see what it was that all the world said was lovable. Break off the tiny fingers, bend the flat feet, loosen the hair, twist the head around, and the thing made one sound—a sound they said was the sweet and plaintive cry “Mama,” but which sounded to me like the bleat of a dying lamb, or, more precisely, our icebox door opening on rusty hinges in July. (20-21)

この箇所は『青い眼がほしい』の語り部である黒人少女クローディア (Claudia) が、皆が綺麗だと言う人形がなぜ綺麗なのか、その理由が知りたくて人形を分解してしまう場面である。その結果クローディアは、美しいと呼ばれる人形は、決して美しくはない部品の寄せ集めによってできていること、そして完成した人形は皆が美しいと認めるから美しいのであって、絶対的な美の基準が存在し、それに適っているから綺麗なわけではないことを学ぶのだ。

つまり白人的価値観が価値あるものである理由は、白人が合衆国社会において権力を独占し、社会の主流となっているからに過ぎず、黒人女性が本来の自分らしさを抑圧してまで従うべき絶対的な価値ではないことをモリスンは示しているのだ。

またマヤ・アンジェロウ (Maya Angelou, 1928-2014) はエッセイ「おしゃれ」 (“Getups,” 1993) において、自分らしく何かを選択することの大切さを示している。

I have lived in this body all my life and know it much better than any fashion designer. I think I know what looks good on me, and I certainly know what feels good in me....

Seek the fashion which truly fits and befits you. You will always be in fashion if you are true to yourself, and only if you are true to yourself. You might, of course, rightly wear that style which is emblazoned on the pages of the fashion magazines of the day, or you might not.

The statement “Clothes make the man” should be looked at, reexamined, and in fact reevaluated. Clothes can make the man or woman look silly and foppish and foolish. Try rather to be so much yourself that the clothes you choose increase your naturalness and grace. (47-48)

アンジェロウは常に、自分が好み、そして自分に似合うと思う服装を選択してきたと記している。しかしそれは、いわゆる「一般的な」母親の服装とは異なるため、息子に咎められてしまう。周りと同じであることが大切だと感じざるを得ない年頃であった息子の意見を尊重し、一般的な母親の服装をするようになったアンジェロウだったが、息子が成長し、分別が付く年頃になってからは、また自分が好む服装をするようになる。アンジェロウは、流行の服装を好むことも一つの選択肢として認めながら、自分の身体を一番知っている自分自身が似合うと思う服装を選ぶことこそが、自分を上品に見せる方法であるとしている。他者の眼を通じて装うのではなく、自分らしく居ることの大切さをアンジェロウも示しているのだ。

このように黒人女性作家は、黒人であり女性であることを意識的に受け入れて生きることの大切さを訴えているのである。また彼女たちは、今居る場所を守ることの大切さについても描いている。モリスンは『青い眼がほしい』において居場所があることの大切さについても示している。

Outdoors, we knew, was the real terror of life. The threat of being outdoors surfaced frequently in those days. Every possibility of excess was curtailed with it...

There is a difference between being put *out* and being put *outdoors*. If you are put out, you go somewhere else; if you are outdoors, there is no place to go. The distinction was subtle but final. Outdoors was the end of something, an irrevocable, physical fact, defining and complementing our metaphysical condition.

(17, イタリックは原文)

黒人女性にとって家とは愛を感じ、傷を癒す場であった。その居場所を失うことに対する恐怖がこの箇所では描かれているのだ。家の外で人種差別と暴力に晒され続けている黒人にとって、その傷を癒す場を確保することは、さらなる闘いのため、あるいは暴力に耐え抜くために不可欠であった。だからモリスンは、追い出されるのであれば新たに居場所を見つけることが出来るかもしれないが、家無しとなり自らの居場所を失うことは避けなければならないと考えたのだ。またこのことは、今居る場所こそが差別との闘いの出発点であると解釈することも可能である。

またアリス・ウォーカー (Alice Walker, 1944-) はエッセイ「故郷に留まる選択」

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

（“Choosing to Stay at Home,” 1973）において、なぜ南部生まれの黒人が北部へ移動しなければならなかったのか、その理由を言及している。このエッセイで彼女は、ジョージア州で生まれ育った彼女の七人の兄弟がより良い生活をするためになぜ南部を離れなければならなかったのか、さらには黒人作家リチャード・ライト（Richard Wright, 1908-1960）がなぜ南部を離れなければならなかったのかを考察する。その結果ウォーカーは、黒人は南部に住みながらも南部においては見えない亡命者であること、そして二流市民として扱われたくないと考えるのであれば、南部を捨て北部に移動する、あるいは国外に逃亡するしか選択の余地がなかったことを明らかにする。またそれを当然のこととする無言の圧力があったこともあわせて示している。

ウォーカーは同じエッセイにおいて、土地とつながって生きることの大切さを示し、帰る場所としての南部を取り戻すことの大切さも示している。

And when he (=M. L. King, Jr.) spoke of “letting freedom ring” across “the green hills of Alabama and the red hills of Georgia” I saw again, what he was always uniquely able to make me see: that I, in fact, had claim to the land of my birth. Those red hills of Georgia were mine, and nobody was going to force me away from them until I myself was good and ready to go....

This may not seem like much to other Americans, who constantly move about the country with nothing but restlessness and greed to prod them, but to the Southern black person brought up expecting to be run away from home – because of lack of jobs, money, power, and respect – it was a notion that took root in willing soil. We would fight to stay where we were born and raised and destroy the forces that sought to disinherit us. We would proceed with the revolution from our own homes. (160-161)

恐怖によって生まれ育った土地を奪われるのではなく、そして土地に対する愛着心を棄却させられるのではなく、今居るその場所で生活する権利を主張するために、今居る場所から闘いを始めることが必要だと、ウォーカーは主張しているのだ。

アメリカ黒人女性作家はまた、未来の世代がより良い生活が出来るようになるために最大限の努力をすることの必要性を描き続けてきた。そしてその努力は、祖母から母、母から娘へと途絶えることなく受け継がれてきた。元逃亡奴隷であったハリエット・ジェイコ

ブズ (Harriet Ann Jacobs, 1813-1897) の奴隷体験記『ハリエット・ジェイコブズの自伝』(*Incidents in the Life of a Slave Girl*, 1861) に登場する祖母やジェイコブズ自身は、孫や子どもたちのために危険を顧みずに行動した。アン・ピトリー (Ann Petry, 1908-1997) の『ストリート』(*The Street*, 1946) のルーティ (Lutie) は、息子がより良い生活を手にすることができるために必死に努力する母親であった。ロレイン・ハンズベリー (Lorraine Hansberry, 1930-1965) の『日なたの干しぶどう』(*A Raisin in the Sun*, 1959) に登場するリーナ (Lena) やルース (Ruth) は、黒人の誇りを持って生きることの大切さを教える祖母であり母であったし、グロリア・ネイラー (Gloria Naylor, 1950) の『ブリュースタープレイスの女たち』(*The Women of Brewster Place*, 1982) のマティ (Mattie) もまた、息子のために必死に生きる母親であった。このように黒人女性作家が世代を超えて奴隷制時代から現代に至るまで描き続けてきたのは、次世代がより良い生活を手にすることを目指した黒人女性の努力であった。

アリス・ウォーカーは『メリディアン』(*Meridian*, 1976) において主人公メリディアンの葛藤と精神的な崩壊を描いた。彼女がこのような状態に陥る理由の一つに、子どもを手放してしまったことがあげられる。つまり彼女は、子どもを手放すことによって、次世代を育て、また次世代がより良く生きることが出来るように努力すると言う黒人女性の伝統とその責任を放棄してしまったのだ。そのために彼女は精神の崩壊という罰を受けなければならなかったのだ。このことは逆説的に、次世代がより良く生きるために献身する必要があることをウォーカーが示していると解釈することが出来る。

黒人女性にとっての次世代とは、彼女たちと血がつながっている娘や孫娘のみを示すものではない。黒人女性たちは血のつながりを超え、彼女たちよりも若い世代はすべて自らが関与すべき次世代であると捉え、次世代がより良く生きるための努力を惜しまない。このことは、奴隷制時代には女性奴隷から生まれた子どもたちは母から切り離され、重労働に耐えられなくなった年老いた女性奴隷のもとでまとめて育てられたことや、解放後もさまざまな理由からコミュニティで子どもを見守る必要があったことなどに由来しているのだと考えられる。

マヤ・アンジェロウはエッセイ「本当に教えることを知っている人」(“Those Who Really Know Teach,” 1997) において、彼女の母ヴィヴィアン (Vivian) が真の教師であったことを示している。

“They don't know beans. Not even beans about beans.” Vivian's face wrinkled

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

with pity, anger and disgust. “Didn’t they have mothers? Aunties? Grandmothers? Were they raised in barns?” (137)

これはヴィヴィアンがスーパーマーケットで出会った若い女性の買い物の仕方を見ながらこぼした愚痴である。差別的な待遇におかれていた黒人の平均年収は、白人に比べて非常に低く抑えられていた。そのため、家計を切り盛りしなければならない黒人女性は、如何に良いものを安く手に入れ、また安い物であってもそれをうまく使いこなす知恵を持っていなければならない。そしてその知恵を授けるのは、母親や祖母の役割であった。しかしアンジェロウ母娘たちの目の前で買い物をしている若い女性にはそのような知恵があるようには見受けられず、ヴィヴィアンは嘆いていたのだ。

この母親の遠慮知らずの声は当然、若い女性の耳にも届く。そしてその声を聞いた女性はヴィヴィアンに対し、「教えていただきたいものですね」と応答する。そして彼女はアンジェロウに買い物を任せ、「家事とはどうやってやるのかを教えてあげましょう」と言って見ず知らずの若い女性とカフェへと入っていくのだ。このようにヴィヴィアンにとって、より良く生きるための知恵を授けるべき相手は自分の娘だけではなく、目の前の見知らぬ若い女性もまた知恵を授けるべき相手だったのだ。アンジェロウは真の教育者であるためには、教えたいという衝動と勇気の両方を兼ね備えていなければならないとしているが、多くの黒人女性はその両方を兼ね備え、次世代を教育しながら知恵を継承し続けてきたのだ。

また前述の『メリディアン』において精神が崩壊したメリディアンが復活するきっかけの一つになったのは、彼女が選挙人登録運動に戻ることを決意したことだった。メリディアンは自分の娘に対する責任を果たすことは出来なかったが、選挙人登録運動という他者を教育してより良い生活を手にするための手助けをする運動に参加することで、次世代への責任を果たし、精神を回復させたのである。

ここまで黒人女性作家の作品やエッセイに描かれた黒人女性の生き方を概観してきた。これらのことから黒人女性作家が考える理想的な黒人女性の生き方をまとめるならば、黒人であり女性であることに誇りを持ちながら、白人化するのではなく黒人女性として〈わたし〉らしく今いる場所で、娘や孫娘などの若い世代がより良い生活を手にすることが出来るよう努力を惜しまない生き方、とまとめることが出来る。このように特に黒人女性作家であるブラック・フェミニストの理想をまとめるならば、それはキングが描いた夢、今居る場所で黒人として次世代のために努力して生きることとほぼ一致していたと言える。

ゆえに公民権運動が性差別を内包した運動であったにも関わらず、その運動の象徴としてキングが示した夢に関しては黒人女性もまた共有することが出来たのだ。

Ⅲ. 夢を実現させるための連帯

ブラック・フェミニストたちは、彼女たちの夢を叶えるために連帯することを志向する。しかしその連帯は黒人女性だからといって単純に形成されるものではなく、黒人女性たちが内包している差異を越える努力をしなければ、達成されることはない。このような黒人女性たちの間に存在する差異を乗り越えようとしたのは、グロリア・ネイラー (Gloria Naylor, 1950-) の『ブリュースタープレイスの女たち』 (*The Women of Brewster Place*, 1982) である。この作品に登場する女たちは、出身地や性的志向、経済状況などそれぞれが異なるが、それらを乗り越えながら連帯して困難を乗り越える方向へと歩み始めるのだ。

そしてトニ・モリスンの『ビラヴド』 (*Beloved*, 1988) に登場するポール D (Paul D) やアリス・ウォーカーの『カラーパープル』 (*The Color Purple*, 1982) のミスター (Mr-) の存在を考えると、黒人女性作家は性別を越えた連帯を志向していると言える。またベル・フックス (bell hooks, 本名: Gloria Jean Watkins, 1952-) は『ブラック・フェミニストの主張』 (*Feminist Theory*, 1984) において、性差別や性暴力の問題がありそれを解決しなければならないのは当然のことだと前置きしながら、それでもなお黒人男性は差別撤廃運動の同志であるとしている (103)。これらのことから明らかのように、黒人男性もまた黒人女性が連帯すべき対象であった。

さらに黒人女性たちが目指した連帯の輪は、人種や国境をも越えて拡大する。オクテイヴィア・バトラー (Octavia Butler, 1947-2006) は『キンドレッド』 (*Kindred*, 1979) において、白人男性ケヴィン (Kevin) と黒人女性ダイナ (Dana) との連帯、つまり人種と性別を超えた連帯の可能性を示している。またウォーカーの『カラーパープル』や『喜びの秘密』 (*Possessing the Secret of Joy*, 1992)、アンジェロウの様々なエッセイなどにおいては、国境を越えてアフリカの人びととの連帯の可能性が探られている。

人種差別や性差別、さらには経済格差の問題。何重もの差別が覆いかぶさっているのがアメリカ黒人女性である。そのためブラック・フェミニストによるコンバヒー川集団

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

(Combahee River Collective)² は、1977年に発表した「ブラック・フェミニスト声明」(“A Black Feminist Statement from the Combahee River Collective.”)において、黒人女性が真に解放されれば、すべての人が自由になると主張しているのだ。つまりブラック・フェミニズムとはすべての人が抑圧されない社会を目指す、すべての人のための運動であると言える。ゆえに彼女たちが連帯する相手は、ジェンダー、性別や人種、国籍、さらには世代を越えて広がるのだ。

またこれらの連帯を可能にするには、歴史を共有することが必要であった。『キンドレッド』のデйнаとケヴィンが連帯の可能性を見出したのは、タイムトラベルによって歴史を共有したことの意味が大きかった。また子殺しゆえにコミュニティから疎外されていた『ビラヴド』のセタ (Sethe) が連帯の輪に戻ることができたのも、彼女自身の過去をコミュニティのメンバーが共有し、再記憶 (Rememory) されたためであった。

さてここでもう一度、キングのスピーチに戻りたい。

With this faith, we will be able to work together, to pray together, to struggle together, to go to jail together, to stand up for freedom together, knowing that we will be free one day. (105, 下線引用者)

ここでキングが共に立ち上がろうと呼び掛けている対象は、「私たち」(We) という言葉で示されている。20万人を超える聴衆に向かって呼びかけるキングが、「私たち」と表現するのは当然のことではある。しかしここで考えなければならないのは、「私たち」とは誰なのかということだ。ワシントン大行進に参加した20万人を超える人々の中には、黒人男性、黒人女性のほかにも白人の男女、先住民やアジア系など、さまざまな人種、民族の男女が含まれていた。つまりキングが呼びかけた「私たち」とは、黒人男女だけでなく、人種やジェンダーを越えたすべての人びとが含まれていると言えるのだ。

このことはキングが黒人のみを示す場合には、「私たち」とは表現していないことから明らかである。次の引用は、黒人がおかれた状況を概観するスピーチの冒頭である。

2 コンバヒー川集団は、1974年にボストンで設立された黒人のフェミニズム集団。南北戦争中の1863年6月2日、ハリエット・タブマンは、ゲリラ戦を指揮し750人以上の黒人奴隷を救出しているが、その闘いの場となったのがサウスカロライナ州を流れるコンバヒー川であった。この川の名前が、集団の名前の由来となっている。

But one hundred years later, the Negro is still not free. One hundred years later, the life of the Negro is still sadly crippled by the manacles of segregation and the chains of discrimination. (102, 下線引用者)

このようにキングは黒人のみを示すために、「私たち」ではなく「黒人」(the Negro) という表現を用いているのだ。このことから、彼が共に立ち上がろうと呼び掛けた「私たち」には、あらゆる人種や民族の人びとが含まれていることが明らかとなる。つまりキングは、人種や民族、性別や世代を越えたあらゆる人びとと連帯して、彼の夢を実現させようと考えていたのだ³。

このようなキングの姿勢は、性別や人種、国境をも越えた連帯で夢を実現することを志向するブラック・フェミニストの姿勢とも合致している。ゆえに公民権運動の実態として性差別が内包されていたとしても、黒人女性たちはキングの夢を自らの夢として共有することが可能であったのだ。

ま と め

キングの夢と、主として作家でありフェミニストであるアメリカ黒人女性が描き続けてきた理想を比較してきた。そして両者が描いた夢が、何か別の存在に変わろうとするのではなく今ある〈わたし〉のまま、今居る場所から、自分たちのためだけではなくむしろ未来の世代のために行動を始めようとする夢であったことを明らかにした。またこの夢を実現させるためには、あらゆる差異を越えた連帯が必要であると考えていることにも共通点があることを示した。これらの共通点から、キングが示した夢が、性差別体制を内包した公民権運動の夢を象徴するものであったとしても、ブラック・フェミニストにとっても共有し得る夢であったと言えるだろう。

ここまではキングの夢との比較対象として。アメリカ黒人女性作家の主張を中心に取り

3 ただし、以下のような例外もある。

The marvelous new militancy which has engulfed the Negro community must not lead us to a distrust of all white people, for many of our white brothers, as evidenced by their presence here today, have come to realize that their destiny is tied up with our destiny. And they have come to realize that their freedom is inextricably bound to our freedom. (103, 下線引用者)

しかしここでは、黒人と白人との間に築かれた結びつきを示すために「our」と「their」が用いられているに過ぎない。

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

上げてきた。最後に、作家ではない公民権運動の活動家たちの言葉をいくつか紹介して、キングの夢が作家以外のブラック・フェミニストにとっても共有され得るものであったことを確認しておきたい。あるがままの〈わたし〉の価値を認めるよう訴えたのは、奴隷解放運動の活動家であり、女性参政権運動の活動家でもあった元奴隷、ソジャーナー・トールズ (Sojourner Truth, 1797?-1883) であった。

That man over there says that women need to be helped into carriages, and lifted over ditches, and to have the best place everywhere. Nobody ever helps me into carriages, or over mud-puddles, or gives me any best place! And ain't I a woman? Look at me! Look at my arm! I have ploughed and planted, and gathered into barns, and no man could head me! And ain't I a woman? I could work as much and eat as much as a man - when I could get it - and bear the lash as well! And ain't I a woman? (94-95)

トールズは、男性が規定する〈女性らしさ〉に収まりきれない彼女自身を例に挙げながら、他者によって存在を規定されてしまうことに抗議したのである。今居る場所で立ち上がる準備をしていたのは、バスの中での不当な人種隔離に「違反」して逮捕された、クロデット・コルヴィン (Claudette Colvin, 1939-) だった。

I was done talking about "good hair" and "good skin" but not addressing our grievances. I was tired of adults complaining about how badly they were treated and not doing anything about it. I'd had enough of just feeling angry about Jeremiah Reeves. I was tired of hoping for justice. When my moment came, I was ready. (Hoose, 29)

コルヴィンは大人たちが何もしないことに苛立ちを覚えていた。しかしそんな子どもたちのために行動しなければならないことを自覚していたのは、世界恐慌の時代に政府の中核に入り込み、黒人のための政策を実行に移す努力を続けた活動家であり教育者であるメアリー・マッククラウド・ベシユーン (Mary McLeod Bethune, 1875-1955) だ。

The drums of Africa still beat in my heart. They will not let me rest while there is

a single Negro boy or girl without a chance to prove his worth.⁴

この言葉通り、彼女は黒人全体のため、特に未来を託す子どもたちのために活動を続けた。若者の価値を見だし、その能力が発揮できるよう尽力したのはエラ・ベイカー (Ella Baker, 1903-1986) も同じである。彼女は従来 of 黒人運動組織では若者が十分に力を発揮することができないと考え、新しい組織として学生非暴力調整委員会を組織し、その活動を支えた。彼女は、黒人ための公民権を求める運動は、決して自分たちだけのものではなく、広くあらゆる人びとのためであることを強調した。

Even if segregation is gone, we will still need to be free; we will still have to see that everyone has a job. Even if we can all vote, but if people are still hungry, we will not be free...Singing alone is not enough; we need schools and learning... Remember, we are not fighting for the freedom of the Negro alone, but for the freedom of the human spirit, a larger freedom that encompasses all of mankind.⁵

さらに公民権運動家であり全米女性機構創始者の一人でもあるアイリーン・ヘルナンデス (Aileen C. Hernandez, 1926-) は差異を越えて連帯することの必要性を説いている。彼女は雇用機会均等委員会委員を務めたこともあり、現在はサンフランシスコを拠点に活動する女性団体 California Women's Agenda において、あらゆる女性の権利のために活動を続けている。

Our goal must be freedom for all people – male and female – unhampered by irrelevant restrictions based on demeaning stereotypes. It is our only hope for bringing about that long-promised humane and equitable society. (74)

このような連帯の意識は、アメリカ黒人女性の歴史を通じて築かれたものであった。この歴史に連なり、より良い社会を目指そうとすることこそが、ブラック・フェミニズムの伝統である。キングという公民権運動の指導者を輩出したモントゴメリー・バス・ボイコット運動の発端を開いた「公民権運動の母」ローザ・パークス (Rosa Parks, 1913-

4 http://www.brainyquote.com/quotes/authors/m/mary_mcleod_bethune.html

5 http://supportellabakerday.com/ella_baker/Quotes.html

キング牧師の「私には夢がある」再考：ブラック・フェミニストはキングの夢を共有できたのか？

2005) は次のように記している。

We, as a race of people, should learn to work more closely together.... We must learn from the past. The gains we made came about because blacks realized that it takes cooperation and determination to make progress in their struggle toward equality. (39)

以上のようにアメリカ黒人女性の活動家たちは、奴隷制時代から現代に至るまで、常に〈わたし〉らしく生きることのできる社会を求め、彼女たちが居る場所から行動を開始し、そして子どもたちの世代が良くなることを目指して、さまざまな人々と連帯を築きながら闘ってきたのである。この脈々と受け継がれてきた歴史があるからこそ、公民権運動に性差別体制が内在されていたとしても、むしろ運動に入り込みその差別体制すらも打破することを目指しながら、キングの語った夢を共有することができたのである。

主要引用・参考文献

- Angelou, Maya. "Getups." *Wouldn't Take Nothing for my Journey Now*. [1993] New York: Bantman, 1997: 43-48.
- . "Those Who Really Know Teach." *Even the Stars Look Lonesome*. [1997] New York: Bantman, 1998: 135-139.
- Branch, Taylor. *Parting the Waters: America in the King Years 1954-63*. New York: Simon & Schuster, 1988.
- Crawford, Vicki L., et al. eds. *Women in the Civil Rights Movement: Trailblazers & Torchbearers 1941-1965*. Indianapolis: Indiana UP, 1993.
- Giddings, Paula. *When and Where I Enter: the Impact of Black Women on Race and Sex in America*. New York: Morrow, 1984. (河地和子訳『アメリカ黒人女性解放史』時事通信社、1989)
- Hernandez, Aileen C. "Racism and Sexism Must Be Vanquished." Valena Williams, ed. *Black Women Stirring the Waters*. Oakland, CA: Marcus Books, 1997: 70-75.
- hooks, bell. *Feminist Theory: from Margin to Center*. Boston, MA: South End, 1984. (清水久美訳『ブラック・フェミニストの主張：周縁から中心へ』勁草書房、1997)
- Hoose, Phillip. *Claudette Colvin: Twice Toward Justice*. Virginia, Donnelley, 2009.
- Jones, Jacqueline. *Labor of Love, Labor of Sorrow: Black Women, Work and the Family, from Slavery to the Present*. [1984] New York: Vintage, 1995. (風呂本惇子ほか訳『愛と哀：アメリカ黒人女性労働史』学芸書林、1997)
- King, Martin Luther, Jr. *I Have a Dream: Writings and Speeches that Changed the World*. Ed by James Washington. New York: Harper Collins, 1992.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. [1970] New York: Vintage, 2007.
- Parks, Rosa. *Quiet Strength*. Michigan: Zondervan, 1994.
- Truth, Sojourner. "Ain't I a Woman?" Miriam Schneir, ed. *Feminism: the Essential Historical Writings*.

New York: Vintage, 1972: 93-95.

Walker, Alice. *Meridian*. [1976] London: Women's Press, 1982.

———. "Choosing to Stay at Home: the Years after the March on Washington." *In Search of our Mother's Gardens*. Orland: Harcourt, 1983: 158-170.